OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ジル・ドゥルーズの哲学における意味と感覚の理論についての人間学的研究
Author(s)	小倉, 拓也
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54017
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　小倉拓也　）	
論文題名	ジル・ドゥルーズの哲学における意味と感覚の理論についての人間学的研究

論文内容の要旨

本論文は、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズの哲学における意味と感覚の論理について哲学的・人間的学見地から研究するものである。本論文は、序論、第1部、第2部、第3部から成り立っており、序論を除く8つの章を含んでいる。

序論では、ドゥルーズの哲学の一般的受容と研究の傾向を批判的に検討し、ドゥルーズ哲学におけるカオス概念の二つの異なる使用法について確認したうえで、それぞれ、システムに対して構成的なカオスと、システムそのものを破壊してしまうカオスとして特定した。そして、ドゥルーズ哲学が、前者の意味でのカオスを称揚しながらも、後者の意味でのカオスに対しては、そこからの保護とそれに抗する闘いを要請している事実を指摘し、「カオスに抗する闘い」という主題がドゥルーズ哲学を貫いることを主張した。そして、ドゥルーズ哲学における意味の理論と感覚の理論が、その最も顕著な展開であることを確認した。

第1部第1章では、主著『差異と反復』（1968年）における、表象＝再現前化の秩序の批判の論理と、そこで取り出される下 - 表象的なものとしてのシステムがカオスと呼ばれていることを確認し、これを批判的に論じた。『差異と反復』においてカオスと呼ばれているのは、諸々の齟齬するセリーと、それらセリー間のカップリング、内部共鳴、そしてセリーそれ自体を越え出る強制運動からなるシステムの様態であり、すなわちカオスとはシステムの名にほかならず、そのかぎりにおいてのみ論じられていることを明らかにした。第1部第2章では、第二の主著『意味の論理学』（1969年）において、このシステムの基本的な組成が踏襲されながらも、システムに対して構成的ではなく、むしろシステムそのものを破壊してしまうようなカオスの位相が提出されていることを見いだし、カオス概念をめぐるドゥルーズ哲学の転換の内実について論じた。下 - 表象的なものとしての「意味」は、表象＝再現前化の秩序に対する批判である以上に、後者の意味でのカオスに対する防御的な特徴が際立つのである。そして、後者の意味でのカオスに抗する闘いの、最も重要な契機を、「器官なき身体」と呼ばれる身体概念に求めた。

第2部第3章、第4章、第5章では、前章で見いだされた『意味の論理学』の「器官なき身体」概念へと至るドゥルーズ歩みを、1945年のデビュー作から辿った。第3章では、ドゥルーズの最初期の仕事に見られる無人島論と他者論をひとつの問題系として論じ、そこから「単為発生による第二の誕生」というキーワードを抽出した。第4章では、その問題系の延長線上に精神分析のマゾヒズムを引き合いに出した倒錯論の内実を明らかにし、ここでも「単為発生による第二の誕生」が主題化されていることを見いだした。そして、第5章では、『意味の論理学』の「器官なき身体」が、まさに「単位発生による第二の誕生」によってカオスに抗して不動の形態を導出するものとして論じられていることを明らかにした。

第3部第6章では、1960年代に意味の理論に託されていたカオスに抗する闘いが、1970年代以降に感覚論へとリレーされていることを、ドゥルーズにおける構造主義言語学の衰退と、芸術論における視覚的な形象の身分の上昇という観点から論じた。第3部第7章では、その感覚論と形象論の具体的な展開として、モーリス・メルロ＝ポンティ現象学と対峙しつつドゥルーズが提出した「感覚の存在」をめぐる議論に注目し、その内実を、「カオスに抗する闘い」という観点から明らかにした。第3部第8章では、ドゥルーズにおける感覚論と形象論の最後の形態である「モニュメント」概念をめぐる議論、そしてその機能として幻視的な仮構作用をめぐる議論を、やはり一貫して「カオスに抗する闘い」という観点から論じた。

このように、本論文は、ドゥルーズ哲学に「カオスに抗する闘い」という主題を見いだし、それを意味の理論と感覚の理論として明らかにするものである。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名	（　小倉拓也　）

	（職）	氏　名
論文審査担当者	主 査　教授	檜垣立哉
	副 査　教授	中山康雄
	副 査　教授	村上靖彦
	副 査　教授（明治大学）	合田正人

論文審査の結果の要旨

本論文は『ジル・ドゥルーズの哲学における意味と感覚の理論についての人間学的研究』と題され、二〇世紀の後半にフランスで活躍した哲学者・思想家ジル・ドゥルーズの、さまざまな時期の作品を扱いながら、とりわけ前期における「意味sens」に関連しつつ精神分析的な立場を強くとりながら探求をなした時代の論考と、後期において「感覚sensation」というテーマに即しつつ、芸術論に関心を寄せた晩年の著作に記述を集中させることにより、ドゥルーズ哲学全体における哲学的議論の核心を浮き上がらせるものである。

当論文は全体として八章から構成されているが、まず序論において、秩序を解体するカオスを巡る省察であると理解されがちなドゥルーズの思考には、実際には内在的に二つのカオス概念が存在し、その一つは哲学内的なカオスであり、もう一つは哲学外的なカオスであり、前者がむしろ秩序構成的なものであるのに加えて、後者はむしろそれを避けるべきカオスであると明確に主張されている。このことにより論者は、ドゥルーズのこうしたカオス概念への姿勢への従来の見解を改めるとともに、それに続く各章では、むしろカオスに直面しつつ、それに抗う試みとしての哲学という方向から、ドゥルーズの諸作品を読み解く意欲的な方向が示されている。

第１部「ドゥルーズとカオス」をなす第一章および第二章では、初期のドゥルーズの作品である『差異と反復』および『意味の論理学』が検討され、とくに『差異と反復』のシステム論的な議論のなかに、ドゥルーズ自身が巧くとらえきれないカオスがいわば避けきれない断片のように散見されることを指摘するとともに、それとドゥルーズのシステム論との関連が提示され、『意味の論理学』の議論の整理とともに鋭い分析がなされている。

第２部「意味／否認／精神分析」にあたる第三章第四章第五章においては、ドゥルーズの初期の作品群である「無人島」や『意味の論理学』での補遺として所収された「ミシェル・トゥルニエ論」、また『意味の論理学』でのメラニー・クラインの議論のなど、意味という領域を巡る、精神分析的なテーマに即したドゥルーズ自身の議論の分析がなされており、一連の議論のなかでの倒錯論、排除論、出産外傷をテーマにした独自の検討がなされ、大変密度の濃いものになっている。論文総体としても一番緻密な議論がなされ、精神分析や臨床の議論への展開が期待できるものである。

第３部「感覚／現象／現象学」に該当する第六章第七章第八章では、後期のドゥルーズの芸術論、とりわけ『感覚の論理』および『哲学とは何か』（ガタリとの共著）における芸術への議論が、ジャン・フランソワ・リオタール、メルロ＝ポンティに加え、エルヴィン・シュトラウス、アンリ・マルディネの議論などを参照しつつ検討され大変オリジナルなものになっている。とりわけメルロ＝ポンティとの対比において、ドゥルーズの議論の独自性を強調した箇所や、マルディネの議論を援用しつつ、独自のカオスへの抗いのあり方を示した記述は、従来、ドゥルーズにかんする議論のなかでも、日本のみならず世界的にみてもきわめて独特なものになっていると考えられ、学術的評価は大変高いと考えられる。

取り上げられている文献も、すでにドゥルーズ研究としては古典的な作品から、最新の論考、また日本フランスのみならずアメリカイギリスなど各国の文献を踏査しており、さらには未刊行のドゥルーズの文献にもあたるなど、学術的な価値の高い研究であると判断することができる。

とりわけ日本およびフランス本国でも、従来はあまり注目されていなかった関連文献、とくに精神分析の検討におけるメラニー・クライン、マルディネやエルヴィン・シュトラウスの文献に仔細にあたり分析を積みかさねた点は大きく評価でき、オリジナルな業績として通用するものになっていると考えられる。基本的なプロットであるカオスに対抗する哲学というヴィジョンも、けっして奇をてらったものではなく、きちんとした文献読解に基づいて主張されており、ドゥルーズ研究、さらには現代フランス思想研究のなかで意義をもつことは明らかである。

またそれぞれの章の元をなす論文は諸学会ですでに発表し査読を通過した論文を再構成したものもあり、また一部は国際学会での発表をへている。この点からみても、充分客観的な学術論文としての評価に耐える論文であると判断できる。利用している文献および海外発表国際大会での発表経験などからも語学的にも充分な能力をもって書かれたことは明確である。

よって本論は博士(人間科学)を付与するのにふさわしい論文であると判断される。